

附属幼稚園の教育(8)

活動について

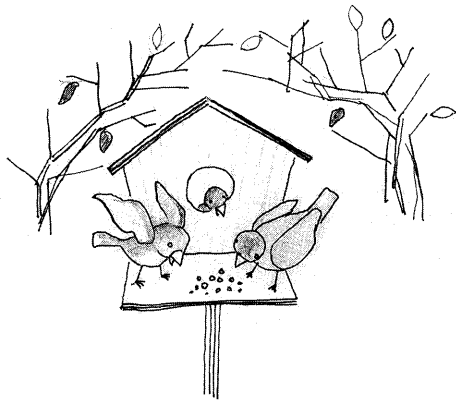
子どもの中から生まれた

活動を育てていくこと

村石 京

幼稚園の日常生活の中では、いつも様々な活動が展開されています。それは子どもが自分自身でやりたいという意欲をもって創り出していく活動であったり、遊びの中から次第に育って拡がってきたものであったり、あるいは年齢や時期を考慮した上で年間の指導

計画として組み込まれたものであったりしています。前者は子ども達の遊びの中で展開される自発的な活動であるのに対し、後者は幼児の発達を促し、偏りのない総合的指導をし、必要な経験をさせていくという教師の意図や配慮によって行われる活動であると考え



られます。

そして従来は、幼稚園の教育とは教師が幼児を指導し、よりよい方向づけをしたり、よい体験をさせることにあると考えられていたもので、後者の考え方が主流でした。それは子どもをよく伸ばし、子どもに合ったものであることは充分考慮されてはいましたが、子どもの側の要求から創られていくものではなく、園の実態や教師の考え方によって構成されていく教師主導型のものでありました。勿論、その時期、その年齢に適切なものとして考えられ、組み立てられた活動を行うことによって、子ども達は良い体験をし、良く成長することが出来ていったのだと思います。

附属幼稚園でも以前は、単元活動といって教師が中心になって組み立てたごっこ遊びをよく行っていました。その中には、いろいろな領域の活動がよく盛り込まれ、子どもたち

はその中で考えたり、話し合ったり、作ったり、遊んだりしながら進められるように組まれていました。子どもと教師は共に力を合わせながら一つの目的のために工夫しあって進めていきました。単元活動には種々ありますが、例えば、動物園ごっこ、乗物遊び、いろいろなお店、水族館や魚つり遊び等数多くあげることが出来ます。四歳児、五歳児の級でその計画を教師が話すと、子どもたちは目を輝かせて、その状況を想像したり、つくることや役割の相談などをしたものです。そして期間をかけてその活動が終了したとき、教師は満足感を持つたり、あるいは思うように進展がなかったときは自分の力不足を痛感したりしたものでした。

これは、以前の保育の流れは教師が中心であって、子どもを大切にされた保育とあって、実際に教師は子どもと共に歩むことで教えら

れたり、その思いがけない発想に驚いたりしながらも、活動を進めていく中心は教師にあって、子どもがこれについていくことで教師と一体になっていったのだと思います。級中のみんながその活動に参加し、みんなの気持ちを合わせて進めていくときは、子どもにも喜びがあったと思います。それ以上に教師の資質、能力等によるところも大きく、教師自身の中に達成感や満足感もありました。自己の力や子ども達の力を結集しあった大きな活動は、教師も子どももそれによって前進し、充実感も大きくあったものです。

勿論そのことは認めながらも、ここで考えねばならないことは、幼稚園の生活は教師が中心なのではなくて、幼児が主体でなければならぬということなのです。子どもが自分自身で考え、自分でやりたいと思ったことが出来ることに大きな意味があります。主体的

に活動するとは、子どもが教師に依存的であったり、受け身であったりするのはなく、子どもが自分で、あるいは友だちと共に考えたことが出来る場であってこそ意義があります。

このことに思いがいたった現在では、附属幼稚園では子どもに先立って教師が計画する単元活動などは行ってはいません。また、時間を区切って一斉に音楽リズムとか劇遊びをするために、子どもたちを呼び集めることもしなくなりました。

幼稚園とはあくまでも子ども中心の場です。そのためには、子ども一人ひとりが思う存分自分のやりたいことが出来る場であるように保障していかなければならないと思います。今日も一日、友だちと一緒に好きなことをして遊べる、この思いが子どもの心の中に充実感を持たせ、次の遊びへの意欲を起こさ

せるものだと考えます。

以前、計画的に活動を子どもに与えていた頃は、勿論そのときはそれで一生懸命であったのですが、今から思うと活動を行うことのみ気持ちが集中して、一人ひとりの子どもの心に目が向かなかつたり、他のことをしたいと思う子どもの気持ちを汲むことが出来なっていたことが多くありました。他のことに興味があるために、教師の提案する活動に積極的でない子どもを意欲的でないと評価したりして、結局は子ども一人ひとりの心を見つめるゆとりが教師の側にもなかったということなのでしょう。

子どもの心は一人ひとり違っています。そして発達も違うし、興味も違ってきます。幼稚園生活においては、子どもが今やりたいと思ったことが充分出来るように、教師はそれを支え援助していくことこそ、教師の役割と

言えると思います。

そして子どもの遊びの中から生まれてきた活動に私も教師は目を向け、それを育てていくようにしたいと思っています。教師の言葉かけ、援助、そして参加などによって活動は育ったり、すぼまってしまったりする場合があります。またとかく大きな集団による大きな活動とか、長く続いたものへの評価が高くなりがちですが、子どもの心が充分それに向かっている場合は良いとしても、大きな活動を育てることにのみ多くの勢力が注がれてしまい、そのために小さな活動を見落としてしまうことがあってはならないと思います。一人の子どもにとって、自分がやりたいと思ったことが充分出来るなら、それは活動の大小とは関係がないといえると思います。

しかしそれでも、子ども一人ひとりが充分に遊び込み、やがて級の中に落ちつきが出

て、級の一員としての自覚が芽生え出す二期後半から三学期にかけては、子どもの発意

で思いもかけず楽しい素敵な活動が生まれることがあります。私も教師は、子どもの中から出て来たものを充分な心配りをもって、大切に育てたいと思っています。例えば簡単な音楽劇への意欲が、小道具づくりやミニ劇場の設営までに発展したことや、積木でつくった基地や段ボールでつくった乗物などが

合わさって、遊園地ごっこに進められていたりしています。

教師側が子どもに先立って、活動を与えていなくても、園の生活の中では種々な活動が生まれています。子どもの中から生まれたものを見落とすことなく、そして適切な援助を行うことによって、活動は活き活きと育ち、進められていくと思います。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)